

寸言

日機装株式会社
執行役員
航空宇宙事業本部長
長門 祥一



ベトナムで航空機用部品を生産するという事

1980年、炭素繊維製造技術の研究からスタートした当社の複合材事業は、1984年逆噴射装置（スラストリバーサー）用カスケードのCFRP化に成功しました。その後、軽量化、長寿命化を追求する既存の航空機への置き換えに始まり、新たに開発される航空機のほとんど全てに採用されて来ました。当社技術仕様による、解析・評価・設計から当社工程仕様による生産。加えてこれらを維持する品質システム、および納期管理が評価されての事と自負しております。また、先般（2013年2月末）累計40万個目のカスケードを出荷いたしました。1984年の量産開始から30年をかけての偉業であると自負しつつ、お客様のご支援、諸先輩を含む当社従業員の真摯な取組みがこの30年間を支えてきたと考えています。今後も取り組むべき新たなプログラムも多数動き出しており、当社製カスケードが航空機の安全な降着にますます貢献できる事を光栄に思っております。

一方で、旺盛な航空機需要に支えられた新型機の開発ラッシュ、航空機部品メーカーの裾野が広がりつつある昨今、この機を捉え当社も事業基盤の拡大を図っています。ベトナムハノイ市郊外に航空機用複合材部品の成形、加工、金属部品も含めた組立までを行う工場を2010年に稼働させ、その後徐々に拡張、今春には37,000㎡の敷地に25,500㎡の建屋面積を持つ大型工場を完成させました。もちろんベトナムでは初めてとなる航空機用複合材部品専用工場です。航空機産業界で求められる常識、『品質・納期』がベトナムで確立する事が出来るか。これが進出決定に当たっての大きな検討課題でした。

当社にとってベトナムでの生産は初めてではありませんでした。ホーチミン市にて当社メディカル部門用の消耗品工場を立ち上げたのが10年前。ベトナム人の勤勉さ、手先の器用さなど日本人同様の感性（良い意味でベトナム人らしさが伺える場面もありますが）は実証済みでした。しかし、そうは言っても航空機。作業開始前に日本での長期の実習教育を実施し、製品保証に対する考え方を徹底して教育しました。当社が長年培ってきた航空機部品製造のフィロソフィーを植え込み、航空機部品を製造することの意味、怖さ、日機装製品として顧客へ供給する事の意義を繰り返し教育いたしました。おかげさまで現在のところ一件のクレームもなく、まさに教育の成果、品質システムも順調に機能していると言っていると思います。

アジア・ローコストカントリーの代表でもあるベトナム。しかし、安いだけの国ではありません。かつての日本のように、国全体が「成長し豊かになるんだ」という、大きな夢と希望を持っています。当社ベトナム工場社員も、航空機部品を製造するという大きな社会的使命を自覚し、国の発展に貢献するんだという使命感に燃えています。経済発展、国力の象徴でもある最先端航空機。その航空機に取り付けられる部品を、自分たちが責任を持って製造し、エアフレイマーに納入し、最先端航空機の一部となって自国を含む各国へ飛び立っていく。いかにこの仕事を誇りに感じているかご理解いただける事と思います。また、ベトナムのエアラインからも自国で生産された製品が、自社の保有する機体に取り付けて帰ってくる事に誇りを感じていただいています。